

伊是名村

村指定史跡

い ぜ な  
伊是名  
か い づ か  
貝塚

伊是名村字伊是名



26° 55' 4.16" N

127° 55' 55.57" E

村指定史跡（昭和57年11月1日）

用語解説

- 砂丘  
海岸の砂が吹きあげられてできた丘。
- 竪穴住居跡  
地面を浅く掘り下げて床面とし、その上部に屋根を葺く構造の住居の跡。
- 石列・石組  
石を並べたり、円形や方形に囲った遺構。主に建物の基礎部分に見られる。
- 伊波式土器  
うるま市石川の伊波貝塚から出土した土器に代表される形式の土器。平底の深鉢形が多い。縄文時代後期の土器で沖縄諸島及び周辺離島に分布する。
- 荻堂式土器  
北中城村の荻堂貝塚から出土した土器に代表される形式の土器。平底の深鉢形が多く、口縁に四つの山形突起を持つ。縄文時代後期の土器で沖縄諸島及び周辺離島に分布する。
- 石斧  
石製の刃を付けた斧。木製の柄に取り付けて使用する。
- 敲石  
物をたたいてつぶすために用いられた石器。棒状、円柱状、楕円球状、球状など様々な形のものがある。

●現在の様子（2018年撮影）



伊是名貝塚は現在の伊是名集落北西部に位置する、約3500～2500年前の遺跡です。砂丘に立地しており、竪穴住居跡や石列、石組などの遺構に加えて、様々な遺物が出土しています。なかでも伊波式・荻堂式などの約3500～3000年前の縄文時代後期の土器を中心として、底から口の部分まで揃った状態で多数出土しています。また、貝殻を加工した貝製品や、木を加工する石斧、堅い木の実を潰す敲石の他、黒曜石や島内で得られる石材（チャート）を材料とした剥片石器が出土しました。黒曜石は佐賀県腰岳産であることが判っており、縄文時代の人々が海を越えて交流していた事を示しています。

【参考文献】

- ・伊是名貝塚学術調査団編。2001。『伊是名貝塚』。勉誠出版。
- ・上原 静・玉那覇有登・知念政樹。2015。「伊是名貝塚発掘調査」。沖縄大考古(17)：1-121。



保存状態がよい縄文時代の土器が多数出土

ジュゴンの骨や巻貝で作ったアケヒサリーが出土しているんだね。おしゃれたね。



● 釣針状貝製品



● 土器出土状況

現在の伊是名島にはイノシシは居ないけれど、貝塚からはイノシシの骨が出土したのだよ。誰かが運んで来たのかもしれないね。



● 磨製石斧



伊是名村

なか だ う え  
**仲田上遺跡**  
い せ き

伊是名村字仲田



26° 55' 35.71" N  
127° 56' 53.06" E



用語解説

● 竪穴住居跡

地面を浅く掘り下げて床面とし、その上部に屋根を葺く構造の住居の跡。

「伊是名ふれあい民俗館」で、剥ぎ取った住居を見てみたいな。

土器は萩堂式・室川式・宇佐浜式など、石器は、磨石や敲石等が出土したのだよ。



● 現地説明会の様子

● 調査風景

● 竪穴住居跡



● 現在の様子 (2018撮影)



縄文時代晩期の竪穴住居を発見

仲田上遺跡は現在の仲田集落の北西に位置する遺跡で、道路工事により削られた斜面に、竪穴住居跡の断面が見えたことから発見されました。

その後、発掘調査が行われ土器や石器なども見つかっています。この住居跡は住居の形や土が積もった様子がわかりやすいことから、壁ごと剥がす特殊な技術を用いて切り取られ、現在は「伊是名村ふれあい民俗館」の展示物として活用されています。

伊是名島では約20ヶ所の遺跡が確認されていますが、はっきりした住居跡が確認できた遺跡は多くありません。そのため、仲田上遺跡の竪穴住居跡は、島の縄文時代晩期(約2500~2300年前)の生活を考えるうえで、とても重要です。

【参考文献】

- ・伊是名貝塚学術調査団編。2001.『伊是名貝塚』。勉誠出版。
- ・伊是名貝塚学術調査団編。1994.『仲田上遺跡』。
- ・アドバイザー編。2004.『はなぬ仲里』。仲田区字誌刊行会。

用語解説に  
登場する土器のみ



ど き と う い ち ら ん ひ ょ う  
土器等一覧表

ためになるかも！9ちよこつとコラム



年代	主な土器・陶磁器				
9000年前	 サキタリ洞遺跡 押引文土器				
縄文時代	 渡具知東原遺跡 爪形文土器(ヤブチ式)				
前期	 曾畑式土器				
中期					
後期	 嘉徳I式土器	 安和与那川原遺跡 伊波式土器	 嘉手納貝塚 荻堂式土器	 大山式土器	
晩期	 喜念I式土器	 宇佐浜式土器	 壺形 仲原式土器	 深鉢形	 阿波連浦下層式土器
弥生～ 平安並行 I～III期	 弥生土器	 真栄里貝塚 甕形(縄文系) 真栄里式土器	 真栄里貝塚 甕形(弥生系) 真栄里式土器		
IV期	 フェンサ下層式土器				
グスク時代 11～12c頃 開始 16c頃まで	 フェンサ下層式土器	 我謝遺跡		 グスク土器	
	 滑石製品石鍋	 カムイヤキ	 白磁玉縁碗		
宮古・ 八重山 諸島	 下田原期 下田原式土器	 新里村期 新里村式土器	 新里村期 ピロースク式土器	 中森期 中森式土器	 パナリ期 パナリ焼

伊江村

ばる  
だいさんかいづか  
ナガラ原  
第三貝塚

伊江村川平



26° 42' 37.7" N  
127° 46' 57.14" E

用語解説

- 竪穴住居跡  
地面を浅く掘り下げて床面とし、その上部に屋根を葺く構造の住居の跡。
- 炉跡  
火を使って調理等をした跡。住居の外にある場合もある。
- 貝塚  
食べた後の貝殻が、大量に積み重なった状態をいう。貝殻だけでなく、魚骨・獣骨や、日常生活に用いられた土器・石器・貝製品・骨製品なども含まれていることが多い。
- イモガイ  
サンゴ礁の海で採れる巻貝。主に、女性用の腕輪に加工されたが、遠く北海道の礼文島(れぶんとう)では、イモガイ製のペンダントが出土している。弥生～平安並行時代I～II期、沖縄で採れたイモガイやゴホウラは交易品として、九州をはじめ全国各地に広がっていったと考えられる。
- 集積遺構  
貝などを1カ所に集めて置いた遺構。
- 埋葬  
死体または遺骨を土中に葬ること。

遺跡近景



ナガラ原第三貝塚は、伊江島の南海岸にある縄文時代後期(約3400年前)から弥生～平安並行時代I～III期(約2300～1600年前)の遺跡です。

発掘調査において、縄文時代後期の地層を掘り込んだ墓が3基見つかりました。そのうちの1基から、ゴホウラ製の腕輪をつけた人骨が発見されました。その他、縄文時代後期の遺構として、竪穴住居跡や多数の炉跡等が確認されています。

弥生～平安並行時代I～III期の地層からは、貝塚やイモガイの集積遺構が見つかりました。イモガイは九州等の地域で腕輪等の装飾品の材料となった貝の一つで、九州の人々との交易のために、集めて保管していたと考えられています。

また、遺物として土器、石器、貝製品、骨製品、貝類、イノシシ等の獣魚骨等が大量に見つかり、中には島外から持ち込まれた可能性がある土器や石材、貝等もありました。

ナガラ原第三貝塚は、沖縄諸島における埋葬の方法や、時代ごとの土地の使い方等を知る上で貴重な遺跡です。

【参考文献】

- ・伊江村教育委員会. 1999. 『伊江島の遺跡：遺跡詳細分布調査報告』.
- ・伊江村教育委員会. 2017. 『カヤ原遺跡A地点 ナガラ原東貝塚 ナガラ原第三貝塚』.

## ● 遺構検出状況



腕輪を着けた人は、  
やっぱり偉い人  
だったのかな。



この遺跡からは竪穴住居  
や炉跡の他、ゴホウラ製の  
貝輪を着けた人骨や土  
器・石器・貝製品等が多  
数出土したのだよ。



埋葬の方法や時代ごとの土地の使い方を知る上で貴重な遺跡



● 竪穴住居跡と炉跡



● 炉跡



● 無文土器（縄文時代中期）



● 無文土器（弥生～平安並行時代）

●クジラ骨製簪



●獣形貝製品



●人骨検出状況(東から)



貝輪着装状況



女性や男性にかぎらず、指輪やピアス、ペンダントなどを身につけている人を多く見かけます。

先史時代の人々も、そのような装身具を身につけていたことが、出土品からわかっています。きれいな色や光沢をした貝殻や石、動物の骨や歯などから、腕輪や、ペンダントと思われるものが作られています。貝殻だけでなく魚や動物の骨や歯を装身具の材料として多く利用するのが、沖縄の先史時代の特徴のひとつといえます。

縄文時代には、ジュゴンやウミガメ等の骨で作られた蝶が羽を広げた形に似た「蝶形骨器」が出現しますが、これは沖縄だけから出土しています。その他、大型イモガイ等を使って作られた「獣形貝製品」が出土しています。

弥生～平安並行時代には、南の海から採れるやイモガイやゴホウラが、南九州から北九州に持ち込まれました。そこで主に、イモガイは女性用の腕輪に、ゴホウラは男性用の腕輪に加工され、遠くは北海道まで運ばれていきました。

先史時代の装身具は、身を飾るだけでなく、権力者が自分の力を誇示するために身につけたとも考えられます。悪霊等から身を守るために用いることもあったかもしれません。

また装身具は、生きている人が身につけるだけでなく、死者を葬る際、副葬品として、死者の側に置いたり、棺の中に入れていたりすることがあります。これは、縄文時代の遺跡から現代まで続く習俗(昔から伝わる習わし)です。



# 伊江村 湧出海岸 陶磁器散布地

伊江村東江上



26° 44' 14" N  
127° 47' 30.21" E

## 用語解説

### ●「湧出」

伊江島の北西岸に位置し、水が湧き出ることから「湧出」と呼ばれる。昔からの大事な水源地として今なお飲料水として使用されている。

### ●湧水地

水が自然にわき出ている場所。

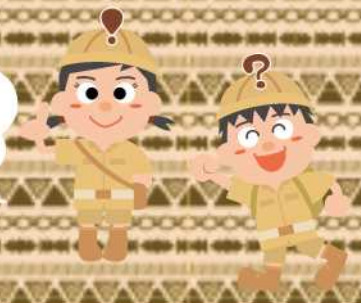
### ●座礁

船が水面下の岩やサンゴ礁等に乗上げて航行できなくなる事。

### ●文様

道具や衣服などの表面に装飾された図形。同じ図柄の繰り返しによって構成されるものを指すことが多い。

海中や海岸にも  
遺物が  
落ちているんだね。



陶磁器類 (内面)



陶磁器類 (外面)



湧出海岸陶磁器散布地は、伊江島の北岸、湧水地である「湧出」の東側100m程の潮間帯(干潮時に陸となる場所)の岩場に位置しています。

遺物は岩場のくぼ地にたまった状態で見られ、海底にも破片が散乱しています。見つかっている遺物は、中国産の陶磁器で、文様等から15世紀後半～16世紀のものと考えられています。

伊江島のグスク時代の遺跡の多くは城山(伊江島タッチュー)とその周辺に分布しています。湧出の近くには現在のところ、遺構を伴うグスク時代の遺跡は確認されていません。それにもかかわらず、湧出海岸で遺物が見つかる理由としては、中国産陶磁器を積んだ船が海難事故のため座礁・沈没した、もしくは座礁・沈没を避けるために積み荷を捨てたこと等が考えられます。

### 【参考文献】

- ・伊江村教育委員会. 1999. 『伊江島の遺跡:遺跡詳細分布調査報告』.
- ・沖縄県立博物館・美術館. 2015. 『水中文化遺産～海に沈んだ歴史のカケラ～』.

● 遠景



### 海岸に中国産陶磁器が散布する水中遺跡



● 海岸に散乱する陶磁器



● 海岸に散乱する中国産陶磁器

この遺跡からは、中国産の青磁や青花、褐釉陶器などが採集されているのだよ。もしかすると、この近くの海中には、船が沈んでいるかもしれないね。





人類活動の痕跡である遺跡は、陸上だけではなく海底にもあります。水域における人類活動の痕跡を水中遺跡と呼びます。沖縄は多くの島々によって構成される地域であり、そこに住む人々は古くから海の恩恵を受け、海とともに歩んできました。その結果、多くの水中遺跡が残されてきました。これまでの海底調査によって次のような水中遺跡が存在することが明らかとなっています。

## 陸上沈降遺跡

もともと陸上にあった遺跡が、地面や海面の変動によって海底に沈んでしまったもの。潮間帯での確認例が多く干潮時に歩くと、土器や石器が散布している様子が見られることもあります。

## 港湾遺跡

港湾は海の中でも人の活動が最も集中する場所なので、その痕跡も残りやすく、進貢貿易の起点だった港湾や、江戸時代に製作された『正保国絵図』に記載されている港湾などで様々な時代の遺物が確認されています。船の停泊具である碇も見つかっています。

## 関連文化財

碇石や鉄錨、船の積荷などが水中から引き揚げられ、陸上に存在しているもので、水中遺跡の存在を知る手がかりになります。碇石や石材の中には、石碑や墓石等に転用されている事例もあります。

水中遺跡は沖縄県で約150ヶ所確認されています。陸上沈降遺跡は先史時代のもの、沈没船等の海難事故遺跡や港湾遺跡は海外と頻繁に交易を行ったグスク時代から琉球国時代のもの、生産遺跡は近代のものがそれぞれ多い傾向にあります。

## 海難事故遺跡

海難事故によって船そのものが沈没したり、沈没から逃れようと積荷などを海に捨てる事によって残された遺跡。マーラン船等の琉球船や、中国、イギリスなどの異国船に関係する遺跡の他、沖縄戦時に沈没したアメリカ軍艦などが確認されています。

## 生産遺跡

石切場跡、魚垣、塩田跡など、海岸や浅い海での人々の生産活動によって作られた遺跡です。石切場跡は保存状態が良好なものが多い傾向にあります。魚垣や塩田等はもともと補修しながら使うもので、人が使わなくなると繰り返される波などの力で自然に崩れていく事から、残りはよくありません。



●宮古島吉野海岸沖海底遺跡に散布する花崗岩石材(イギリス艦)



●石垣島屋良部沖海底遺跡に散布する壺屋焼の壺(イギリス船)



●古宇利島沖に横たわるアメリカ軍艦エモンズ  
(山本祐司氏提供)



●瀬底島沖海底遺跡の碇石

【参考文献】

・沖縄県立埋蔵文化財センター 2017.  
『沖縄県の水中遺跡・沿岸遺跡:沿岸地域遺跡分布調査報告』

用語解説

●マーラン船

18世紀初頭に頃に伝わったとされる中国式の船。近世中期以降に、沖縄本島内および先島を往来した。「マーラン」は中国語で、海上を馬のように走ったことからこの名がついたと言われる。

●進貢貿易

中国と周辺諸国間の公貿易。周辺国から中国へ「貢物」を献上し、中国から「返礼品」を受け取るという形式をとる。沖縄の進貢貿易は14～19世紀に行われ、硫黄、ナマコ、馬等を輸出し、絹製品、茶、鉄製品などを輸入した。

●『正保国絵図』

日本の江戸幕府が、諸大名に命じて国単位で作らせた国絵図で、これに基づき、正保日本図(日本総図)が作成された。

●碇

船を留めるために水中に沈める器具。重量があり、水底に引っ掛かる構造をしている。



●小浜島の魚垣跡

●石切場

石材を切り出すところ。沖縄県の海岸は石灰岩地帯が多く、建築用資材等として切り出された。

●魚垣

海から海岸方向へ逆V字状に石を積み、魚の逃げ口を狭くしておき、潮の干満を利用して魚を捕らえる漁法。垣の高さは水深に合わせる。

●塩田

海の水を蒸発させて塩をとるために、砂浜に設けた区画。

